

ニンジン

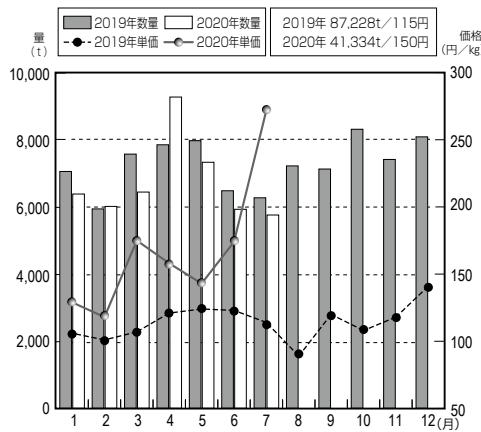
**7月に価格高騰で前年2・4倍に、
コロナで増えた家庭需要に不作襲う**

【概要】

東京市場における7月のニンジン入荷は8%の減で単価は前年の2・4倍のキロ272円。この時期は関東から東北、北海道に移行する時期だが、北海道が前年並みだったのに対して青森が遅れて1割減、千葉が日照不足の影響と切り上がり早く、前年に比べ半減。国産の入荷減をカバーするため、中国産が前年より2・5倍も多い数量が急遽入荷した。単価が国産の3分の1の中国産が増えたため、単価は「2・4倍で済んだ」という状態だ。

【背景】

ニンジンは、千葉から東北に移行するこの時期にトラブルが多い。生育期が梅雨だということもある。今年の7月には高騰といえる単価になったのは、前年19年の7月がやや入荷が多くて18年より2割程度安かったという事情もある。やはり端境期特有の不安定な推移だった。今年に入ってからニンジンの推移をみると、1月には1割程度の減で25%高かった。問題は千葉だった。2月には数量は回復したかにみえたが、単価15%高と強気の推移。



【今後の対応】
さて、3月の「コロナ」騒動開始時には、入荷が15%減って単価は64%高とや高騰きみ。4月はそれを取り戻すかのように18%増でもまだ30%高い。5月は8%減で15%高、6月がやはり8%減と続いたため、単価は42%高くなり、そしてさらに減り続けた7月が、単価が2・4倍に爆ぜた。ニンジンは、コロナ関係でいえば増えた自宅食の必需品目で、需要は常に強めで安定していた。そこに日照不足の千葉が不作で、対応し切れなかったのである。

パレイシヨ類

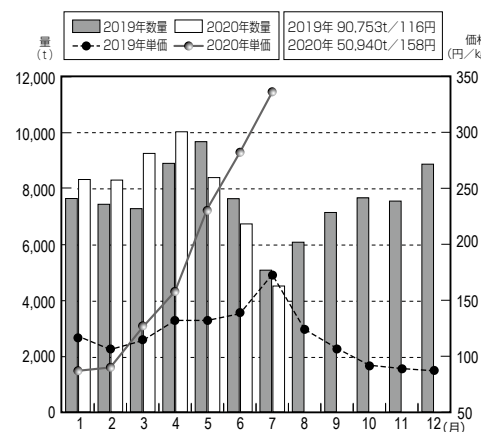
**道産への切替時期に関東産が不調、
業務需要の復調に合わせ安定供給へ**

【概要】

東京市場における7月のパレイシヨ類の入荷量は1割強の減少なのに単価は1・9倍にもなった。実は19年7月にも、7%程度の減少で単価は2・4倍になっている。そもそも北海道に切り替わる時期のため、不安定なのは当たり前。九州の残量も少なく、静岡の切り上がりも早く、千葉は前年並みなのだが、関東産地のなかでは最後まである茨城が7%ほど少なく、そのカバーのために北海道が前年より6割以上増で前倒し出荷した。

【背景】

パレイシヨ類の今年に入ってから推移は、1月は1割近く多く2割以上安かったが、2月は12%増えて15%安。そして、コロナが始まる3月では28%増でも11%高になり、4月も13%増で2割高い。5月には鹿児島、長崎などが前倒し出荷のために残量が少なく、静岡は残量を増やし、北海道も早めの出荷を増やしたものの入荷は13%少なくなり、増勢できた需要が強く76%高くなった。この調子は6月も引き継がれ、12%減で単価は2倍を超えていた。



【今後の対応】
パレイシヨ類の需要は、市場経田のものでも家庭用が強い。東京市場では5月ごろまで、男爵薯の残量に支持があり、続いて始まる静岡産につなぐ。7月は静岡の終了と北海道が本格化するまでの間、関東産地に頼らざるを得ない。ワンポイントリリーフ的な関東産が日照不足で不作傾向になると、どうしても相場は不安定化する。業務用からの引きはまだ弱いからこの程度で済んだ。これから業務用も復活するだろうが、産地も盤石な北海道産になる。

コロナに日照不足が 重なった野菜類

新型コロナウイルスが世間を覆って業務用需要を直撃し、野菜に関しては、供給オーバーぎみの安値推移もあった。しかし、西南暖地や愛知、静岡から関東に産地が移り、7月の東北への切り替え時期に深刻な関東産地は日照不足で生育が遅れ、多くの品目が高値推移となった。7月の東京市場の入荷量は関東産の

減少になんとか輸入品がカバーしたため、数量は5%程度の減だったが、野菜類は総平均で25%高くなった。高値推移は日照不足による不作状態と業務用需要の低迷との引き算と足し算と、昨年との割り算で「入荷減の相場高」と出た。ただし、単価高は家庭需要の堅調と業務用需要復活のバフンスで決まる。

今年の市場相場を読む

主産地長野が市場模様連動し調整、今後の推移は労働力確保いかに

【概況】

東京市場の7月のレタス類の入荷は、前年より1割程度少なく47%高かった。19年7月には7%程度のやや減だったが単価は15%安かった。ということは、入荷は平年並みに近く、安い単価だった翌年の前年高は、やや高程度と判断できる。今年7月は、シエア85%の主産地・長野の7%減、2位の群馬が2割くらい減少。業務用が強い品目だが、今年は家庭需要もやや強めだ。業務用が本格化していないので入荷減に相場はやや鈍感だ。

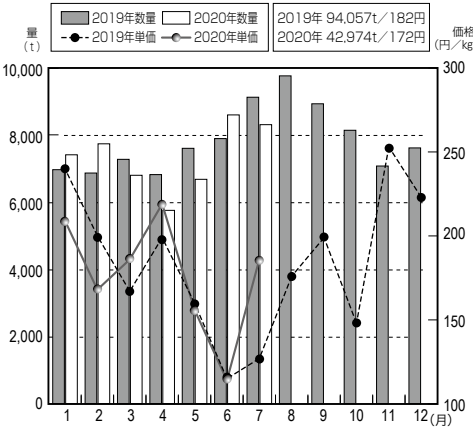
【今後の対応】

変化があまりなく安定していたのは、主産地が長野だからだ。常にマーケットを観察しながら出荷調整しているからだ。関東も群馬に移っているから、あまり関東の日照不足も影響していない。今後の作柄には心配していないが、肝心な収穫のための労働力が間に合うかだ。観光業など他産業とのリクルート協定がうまくいっているようで、研修生への依存度を下げてもなんとか対応しているようだ。コロナの影響は研修生の入国のいかにかかる。

レタス類

【背景】

今年1月は7%増の13%安、2月はさらに13%増えて12%高。香川が関東進出を強化する宣伝戦略に出ているが、主産地の静岡、茨城あたりの対抗意識が強かったためか、いずれも入荷増。香川産は前年より22%減らして仕掛けは外れた。3月はまだ7%減で1割高程度、4月も同様に16%減の1割程度高。5月にはさらに12%減ながら反発せず、単価は2%安程度だからほぼ変わらず。6月には一転、1割の増加でも、なぜか単価はほぼ変化をみせない。



ネギ

3月からのコロナ禍に敏感対応、夏秋産地移行と不需要期で安定

【概況】

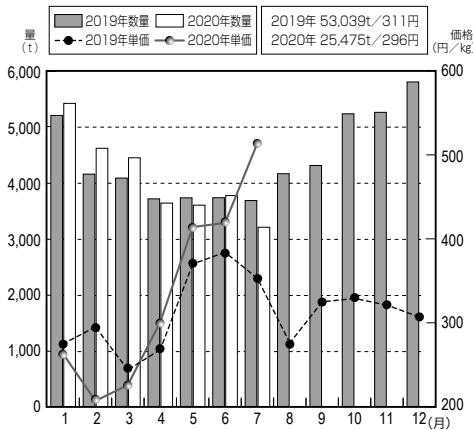
東京市場の7月のネギの入荷は13%減って45%高くなった。前年19年7月は、入荷は3%増の4%高だから、今年はかなり相場が敏感に反応している。7月のネギの入荷減は6割をキープするはずの茨城が25%も減らし、シエアを1割近く落として54%も高値を付けたからだ。中国産が前年より3割多かったが、この程度の高値では入荷は増えない。コロナ関連の家庭需要も1本150円超えではついでにこない。

【今後の対応】

ネギはやはり加工業務用では重要な品目で、マーケットは国産の増減を中国産で調整している。入荷動向を追うと、3月に従来の業務用需要に、家庭向けが入り始め、業務用の失速分を家庭用需要がある程度バランスよく調整してきたと言っている。コロナ事情は遠出自粛とGO TOキャンペーンのはざままで翻弄されながらも、業務用は回復基調に乗っけ、家庭需要もまだ残洋が残る。夏秋産地は青森、秋田、北海道に移り、不需要期でもあり生育も需要も安定していく。

【背景】

今年に入ってのネギの推移は、1月には4%増の4%高、2月は11%増えて3割安くなった。3月は1割増えても7%安くらいまで反発し、4月には2%増の12%高、5月は3%減で12%高、さらに6月は1%増の1割高という推移の末、7月に13%減って45%高くなった。すなわち、入荷量はほぼ平年並みで推移してきたが、3月にやや潮目が変わって需要側が引く張る展開になり、7月に入荷が「息切れ」し始めたことで相場が急伸したという経緯だ。



流通ジャーナリスト

小林 彰一

青果物など農産物流通専門のジャーナリスト。(株)農経企画情報センター代表取締役。「農経マーケティング・システムズ」を主宰、オビニオン情報紙「新感性」、月刊「農林リサーチ」を発行。著書に「日本を襲う外国青果物」「レポート青果物の市場外流通」「野菜のおいしさランキング」などがあるほか、生産、流通関係紙誌での執筆多数。